

8月予報（全24枚）

病防第25号

令和7年（2025年）7月30日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

令和7年度（2025年度）発生予報第5号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和7年度（2025年度）病虫害発生予報第5号（8月予報）

I 気象予報：令和7年（2025年）7月24日福岡管区気象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	30	60
	降水量	30	40	30
	日照時間	30	40	30

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早植え水稻	穂いもち	少	やや少	少(－)	並～やや少 (±)	気温高(－)	巡回調査 防除員報告 (葉いもち)
	紋枯病	並	並	並(±)	並～やや少 (±)	気温高(+)	
	トビイロ ウンカ	やや少	並	並(±)	並(±)	気温高(+)	予察灯調査 合志市 少(－)
	コブノメイガ	やや少	並	並(±)	並(±)	気温高(+)	フェロモントラップ 調査 合志市 少(－)
	斑点米 カメムシ類	やや多	並	並(±)	並(±)	気温高(+)	予察灯調査 合志市 やや多(+)
普通期水稻	葉いもち	やや少	やや少	並(±)	並～少(±)	気温高(－)	
	紋枯病	並	並	並(±)	並～少(±)	気温高(+)	
	トビイロ ウンカ	やや少	並	並(±)	並～少(±)	気温高(+)	予察灯調査 合志市 少(－)

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
普通期水稻	コブノメイガ	やや少	少	並(±)	並～少(±)	気温高(+)	フェロモントラップ [®] 調査 合志市 少(-)
大豆	ハスモン ヨトウ	並	やや少	—	—	気温高(+)	フェロモントラップ [®] 調査 合志市 やや少 八代市 並 阿蘇市 やや少 山都町 少 (-)
茶	炭疽病	やや多	多	多(+)	やや多～並 (±)	降水並(±)	7月の降水 少(-)
	カンザワ ハダニ	多	多	多(+)	並(±)	気温高(+) 降水並(±)	ほ場調査 茶業研究所 やや多(+)
	チャノキイロ アザミウマ	多	やや多	多(+)	並(±)	気温高(+) 降水並(±)	粘着トラップ 合志市 少(-) ほ場調査 茶業研究所 並(±)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	並	並	並(±)	やや多～並 (±)	気温高(+) 降水並(±)	ほ場調査 茶業研究所 並(±)
	チャノホソガ	少	少	少(-)	並(±)	気温高(+) 降水並(±)	フェロモントラップ [®] 調査 合志市 少 御船町 少 (-)
	チャノコカク モンハマキ	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水並(±)	フェロモントラップ [®] 調査 合志市 少 御船町 並 (±)
カンキツ	黒点病	やや多	多	多(+)	並(±)	降水並(±)	果樹研究所 並(±)
	かいよう病	並	並	並(±)	やや多～並 (±)	降水並(±)	果樹研究所 やや多(+)
	ミカンハダニ	並	並	やや少(-)	やや多～ やや少(+)	気温高(+) 降水並(±)	果樹研究所 少(-)
	チャノキイロ アザミウマ	やや少	やや少	やや少(-)	並 (±)	気温高(+) 降水並(±)	トラップ調査 熊本市 やや少(-)
ナシ	ハダニ類	やや多	多	多(+)	やや多～並 (+)	気温高(+) 降水並(±)	



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
ナシ	ナシヒメシ クイ	やや多	やや多	—	やや多～並 (±)	気温高(+) 降水並(±)	フェロモントラップ [°] 調査 宇城市 多(+)
果樹全般	カメムシ類	少	少	—	カンキツ 並～やや少 ナシ 並～少 カキ 並 (±)	気温高(+)	予察灯及び フェロモントラップ [°] 調査 合志市 少 宇城市 少 天草市 少 (—)
夏秋トマト	灰色かび病	やや少	やや少	やや少(—)	並～やや少 (—)	降水並(±)	
	葉かび病	やや少	並	やや少(—)	並～やや少 (—)	気温高(—) 降水並(±)	
	すすかび病	やや少	やや少	やや少(—)	並～やや少 (—)	気温高(+) 降水並(±)	
	うどんこ病	やや少	並	やや少(—)	並(±)	降水並(±)	
イチゴ 育苗ほ	炭疽病	並	並	やや多(+)	並(±)	気温高(+)	
	ハダニ類	並	やや少	やや少(—)	やや多～並 (+)	気温高(+)	
	アブラムシ類	やや多	並	やや多(+)	並(±)	気温高(+)	
夏秋 果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	並	やや少	夏秋トマト やや少(—)	夏秋トマト 並～やや少 (—)	気温高(+)	
夏秋 果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	並	並	—	夏秋キュウリ やや多～並 夏秋ナス 並(±)	気温高(+)	
	アザミウマ類	並	並	—	夏秋ナス, 夏秋キュウリ 並(±)	気温高(+)	
野菜類全般	オオタバコガ	やや多	並	夏秋トマト 並(±)	夏秋トマト, 夏秋ナス, 夏秋キャベツ, キク 並(±)	気温高(+)	フェロモントラップ [°] 調査 合志市 多 八代市 並 阿蘇市 多 山都町 多 (+)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(—)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



2 予想発生量、根拠、対策等

◎早植え水稻

1) 穂いもち

(1) 発生量：少

(2) 根拠

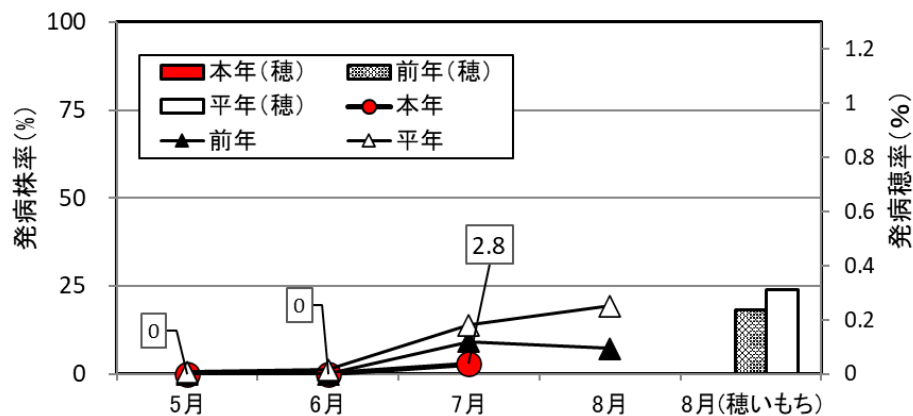
ア 7月の巡回調査では、穂いもちの発病株率2.8%、発病度0.7%（発病株率平年13.9%、発病度平年3.8%）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 穂いもちは発生後の防除が困難であるため、出穂前に予防防除を徹底する。

イ ほ場を観察し、穂いもちの伝染源となる上位3葉に穂いもちの病斑が見られる場合は速やかに防除を行う。

ウ 穂いもちの発生が多い場合は、穂ばらみ後期～穂揃い期に防除を行う。なお、防除後に降雨が続く場合は、穂揃い期の7～10日後に追加防除を行う。



早植え水稻葉いもち及び穂いもちの発生推移

2) 紋枯病

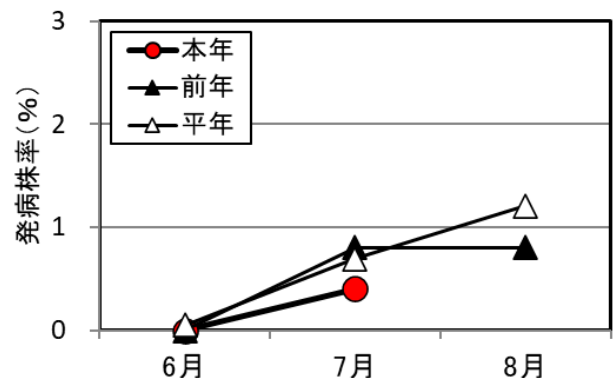
(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発病株率0.4%（平年0.4%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 茎葉散布は穂ばらみ期から出穂期にかけて、粒剤施用は出穂20日前頃に行う。



早植え水稻における紋枯病発病株率の推移



3) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発生は認められず（平年 0.1 頭/株）、平年並の発生であった（±）。

イ 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる調査では、6月第6半旬～7月第5半旬に誘殺は認められず（平年 123 頭）、平年比少の誘殺数であった（－）。

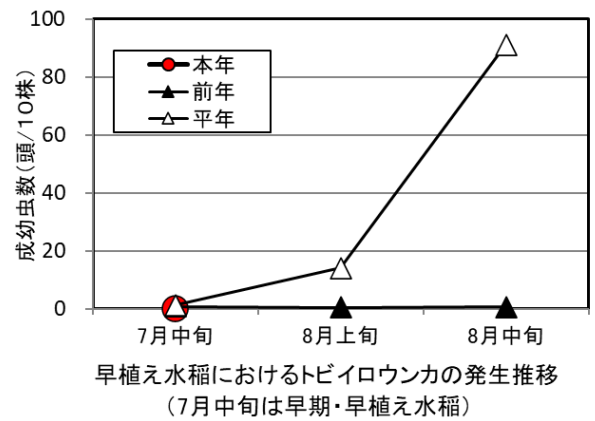
(3) 対策

ア 若齢幼虫期が防除の適期になる。病虫害防除所が発表する防除適期情報（病虫害防除所のホームページ<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>参照）を参考に適期防除に努める。

イ 水田における発生状況を払落し調査などにより確認する。成幼虫数が要防除密度（収穫30日前 300頭/100株）を超える場合は防除を行う。

ウ 箱施薬剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。

エ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。



4) コブノメイガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、株当たりの葉巻き数 0.04 葉（平年 0.14 葉）と、平年並の発生であった（±）。

イ 合志市に設置したフェロモントラップによる調査では、6月第6半旬～7月第5半旬の累積誘殺数が5頭（平年 68 頭）と平年比少の誘殺数であった（－）。

(3) 対策

ア 水田における発生状況を確認し、7月（第1世代幼虫）の被害程度（要防除水準：被害株率 20%以上または被害葉率が 0.2%以上）により、第2世代幼虫を対象とした防除要否を判断する。

イ 防除適期は粒剤が発蛾最盛期（成虫羽化期）、粉剤・液剤は若齢幼虫期（発蛾最盛期から1週間後）である。病虫害防除所が発表する防除適期情報（病虫害防除所のホームページ<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>参照）を参考に適期防除に努める。

5) 斑点米カメムシ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発生は認められず（平年 0.1 頭）、平年並の発生であった（±）。

イ 合志市に設置した予察灯による調査では、6月第6半旬～7月第5半旬の累積誘殺数が268頭（平年 229 頭）、うち大型カメムシ類では60頭（平年 17 頭）と、平年比やや多の誘殺数であった（+）。

(3) 対策

ア 畦畔など周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するため水稻出穂後には行わない。

イ 防除適期は、穂揃い期とその7～10日後（乳熟期）である。2回の防除後に生存虫や新たな侵入が認められる場合は、穂揃い期の14～20日後（糊熟期）に追加防除を行う。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎普通期水稻

1) 葉いもち

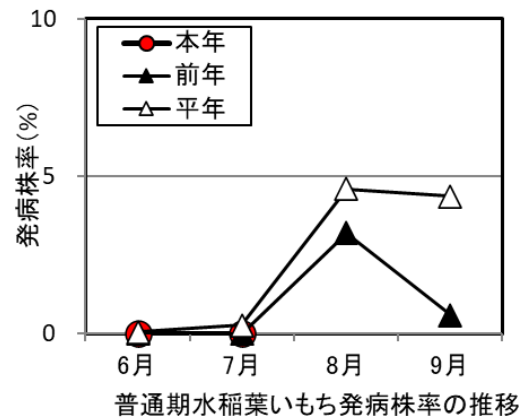
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発生は認められず（発病株率平年0.3%、発病度平年0.1%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア ほ場を観察し、発生初期に薬剤防除を行う。特に、いもち病に効果のある箱施薬剤を使用していないほ場では、いもち病発生予測システム (BLASTAM) の感染好適日（病害虫防除所のホームページ<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>参照）を参考に、早期発見に努める。



2) 紋枯病

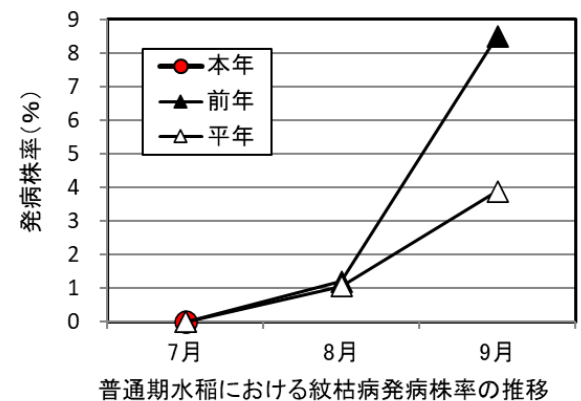
(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発病が認められず（平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 茎葉散布は穂ばらみ期から出穂期にかけて、粒剤施用は出穂20日前頃に行う。



3) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では発生は認められず（平年0.0頭/株）、平年並の発生であった（±）。

イ 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる調査では、6月第6半旬～7月第5半旬に誘殺は認められず（平年123頭）、平年比少の誘殺数であった（－）。

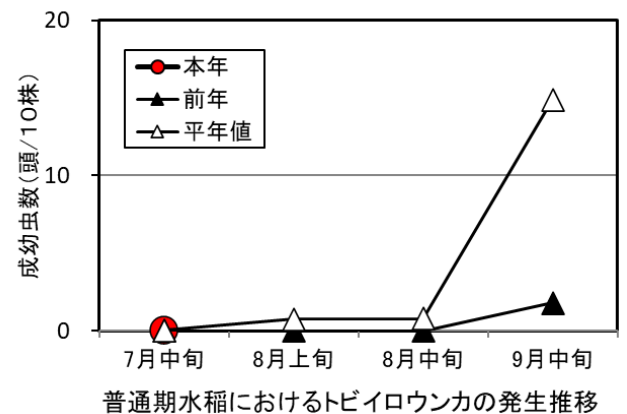
(3) 対策

ア 若齢幼虫期が防除の適期になる。病害虫防除所が発表する防除適期情報（病害虫防除所のホームページ<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>参照）を参考に適期防除に努める。

イ 水田における発生状況を払落し調査などにより確認する。成幼虫数が要防除密度（7月下旬～8月上旬 20頭/100株、8月中～下旬 100頭/100株）を超える場合は防除を行う。

ウ 箱施薬剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。

エ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。



4) コブノメイガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、株当たりの葉巻き数0.00葉（平年0.02葉）と、平年並の発生であった（±）。

イ 合志市に設置したフェロモントラップによる調査では、6月第6半旬～7月第5半旬の累積誘殺数が5頭（平年68頭）と平年比少の誘殺数であった（－）。

(3) 対策

ア 水田における発生状況を確認し、7月（第1世代幼虫）の被害程度（要防除水準：被害株率20%以上または被害葉率が0.2%以上）により、第2世代幼虫を対象とした防除要否を判断する。

イ 防除適期は粒剤が発蛾最盛期（成虫羽化期）、粉剤・液剤は若齢幼虫期（発蛾最盛期から1週間後）である。病害虫防除所が発表する防除適期情報（病害虫防除所のホームページ<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>参照）を参考に適期防除に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎大豆

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 各地のフェロモントラップによる調査では、7月第1～4半旬のハスモンヨトウ誘殺数は平年並～少であった（－）。

表 各地域のハスモンヨトウの誘殺状況（7月第1～4半旬）

市町村名（地域名）	本年（頭）	平年値（頭）	平年比（％）
合志市（栄）	194.5	336.3	58
八代市（鏡）	391.3	373.7	105
阿蘇市（一の宮）	422.8	697.1	61
山都町（鶴ヶ田）	29.0	85.6	34

(3) 対策

ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 病害虫防除所のホームページに掲載しているフェロモントラップの誘殺状況（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を確認し、防除の参考にする。



◎茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発病葉数 23.0 葉/㎡(平年 7.8 葉/㎡)と平年比多の発生であった(+)。

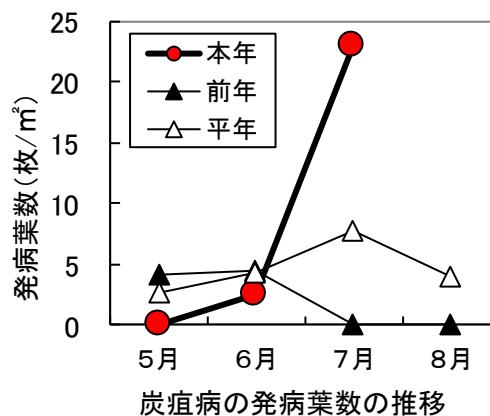
イ 梅雨明け以降、感染の機会となる降雨が少ない条件が継続している(ー)。

(3) 対策

ア 摘採残葉に発病が見られる場合は、三番茶萌芽期から開葉期に防除を行う。

イ 三番茶を収穫しない園では、二番茶摘採後になるべく早く深刈り、浅刈り等により伝染源となる病葉の除去に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) カンザワハダニ

(1) 発生量：多

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 4.5% (平年 0.7%)と平年比多の発生であった(+)。

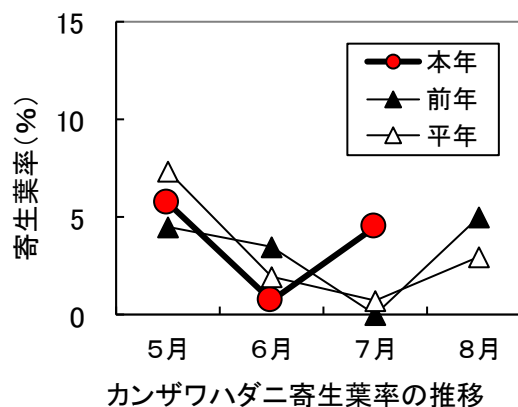
イ 茶業研究所(御船町)の7月第5半旬の調査では、寄生葉率 3.0% (平年 1.0%)と平年比やや多の発生であった(+)。

(3) 対策

ア 発生密度が高い場合は、収穫前使用日数を考慮のうえ防除を行う。なお、規定の散布量を葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。

イ 摘採直前に発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：多

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、寄生葉率11.8%（平年0.6%）と平年比多の発生であった（+）。

イ 合志市の粘着トラップ調査では、7月第1～4半旬の捕獲頭数が18頭（平年110頭）と平年比少の発生であった（-）。

ウ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、7月第5半旬の捕獲頭数が25頭/10ヶ所（平年27頭/10ヶ所）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 新芽が加害されるので、開葉期に防除する。

イ 他の害虫との同時防除を行う場合は、本虫を中心に防除時期を決める。

ウ 有効積算温度シミュレーションによる各地の防除適期は、下表の羽化最盛期となる。

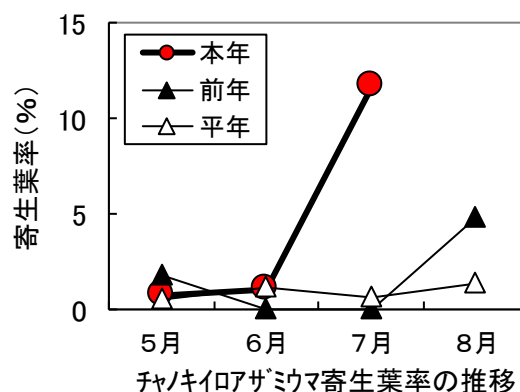


表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果 (7月24日現在)

地点名	本年		平年		平年差	
	第5世代	第6世代	第5世代	第6世代	第5世代	第6世代
鹿北	8月10日	8月29日	8月11日	8月31日	1日早い	2日早い
菊池	8月4日	8月20日	8月3日	8月21日	1日遅い	1日早い
甲佐	8月4日	8月21日	8月4日	8月22日	±0日	1日早い
水俣	8月2日	8月19日	8月2日	8月19日	±0日	±0日
上	8月7日	8月25日	8月8日	8月27日	1日早い	2日早い

4) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 発生量：並

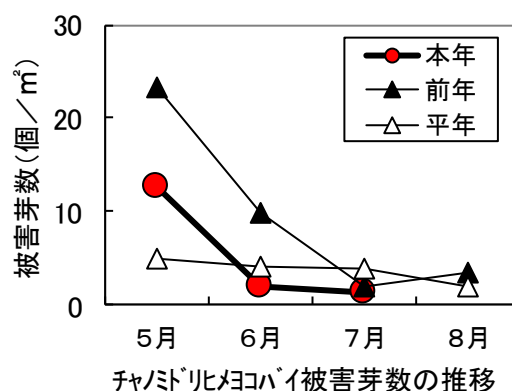
(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、被害芽数1.3本/m²（平年3.8本/m²）と平年並の発生であった（±）。

イ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、7月第5半旬の捕獲頭数が7頭/10ヶ所（平年8頭/10ヶ所）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、摘採後に防除を行う。



5) チャノホソガ

(1) 発生量：少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発生が認められず（被害葉 1.2 枚/ m^2 ）、平年比少の発生であった（－）。

イ フェロモントラップ調査では、合志市は7月第1～4半旬の捕獲頭数が、78頭（平年331頭）と平年比少の発生であった。御船町は7月第1～5半旬の捕獲頭数が、156頭（平年492頭）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 新葉が加害されるので、開葉期と2～3葉期に防除する。

イ 発生時期が重なるチャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。

6) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、被害葉数 1.3 葉/ m^2 （平年 1.3 葉/ m^2 ）と平年並の発生であった（±）。

イ フェロモントラップ調査では、合志市は7月第1～4半旬の捕獲頭数が24頭（平年142頭）と平年比少の発生であった。御船町は7月第1～5半旬の捕獲頭数が43頭（平年43頭）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 新芽を好むが、新葉、旧葉の区別なく大部分の葉を綴るので、発蛾最盛期の7日～10日後に、若齢幼虫を対象に防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎カンキツ

1) 黒点病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

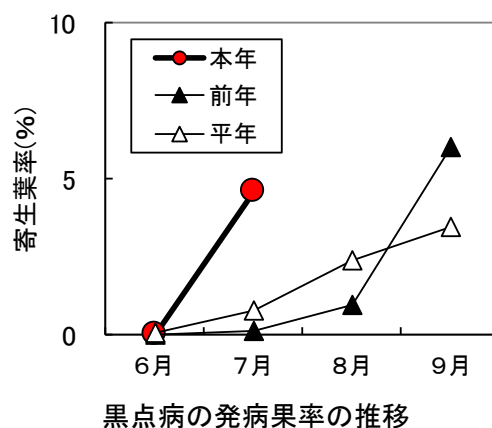
ア 7月の巡回調査では発病果率 4.6% （平年 0.7% ）と平年比多の発生であった（＋）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、7月下旬の発病果率 100.0% （平年 99.0% ）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 保菌率が高い直径 $5\sim 10$ mmの枯枝はせん除する。また、せん除後もそれらの枝は伝染源になるので、園外に処分する。

イ 前回の散布から累積降水量が 200 mm～ 250 mmを越えた時期に防除を行う。また降雨が少ない場合は、前回の散布から30日経過したら必ず防除を行う。



2) かいよう病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発病葉率1.8%（平年1.6%）と平年並の発生であった（±）。

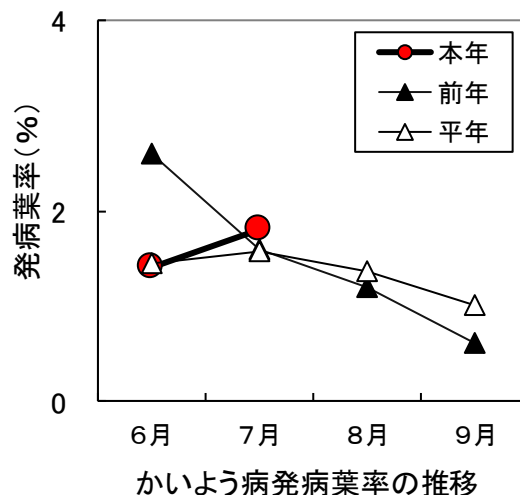
イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、7月下旬の発病葉率13.1%（平年9.5%）、発病果率68.3%（平年37.0%）と、平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 伝染源となる発病葉や枝などのせん除や薬剤防除を徹底し、幼果への感染拡大を防止する。

イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除及びせん除を行う。

ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



3) ミカンハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

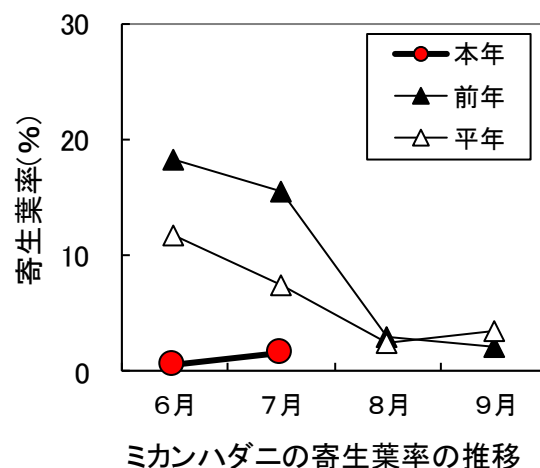
ア 7月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率1.5%（平年7.3%）、寄生頭数0.8頭/10葉（平年3.7頭/10葉）と平年比少の発生であった（-）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、7月第3半旬の雌成虫の寄生葉率1.0%（平年9.3%）、寄生頭数0.1頭/10葉（平年1.2頭/10葉）と平年比少の発生であった（-）。

(3) 対策

ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%または、寄生頭数が5～10頭/10葉に達したら防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



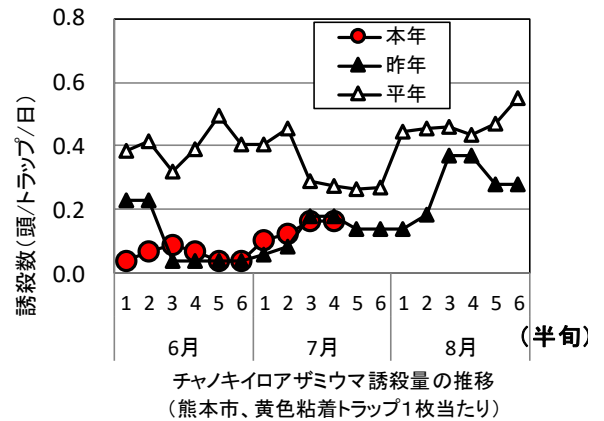
4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では被害果率0.1%（平年0.3%）と、平年比やや少の発生であった（－）。

イ 熊本市河内町の粘着トラップ調査では、7月第4半旬のトラップ1枚あたり捕獲数は0.2頭／日（平年0.3頭／日）と平年比やや少の発生であった（－）。



(3) 対策

ア 平年に比べ羽化最盛期が早いと予測されるため、下表を参考に早めの防除に努める。なお、最新の情報は病虫害防除所のホームページ (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>) を参照する。

表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果 (7月28日現在)

地点名	本年		平年 (10年平均)		平年差	
	第5世代	第6世代	第5世代	第6世代	第5世代	第6世代
熊本	7月29日	8月14日	7月28日	8月14日	1日遅い	±0日
三角	8月3日	8月19日	8月3日	8月20日	±0日	1日早い
本渡	8月4日	8月21日	8月7日	8月25日	3日早い	4日早い
八代	7月31日	8月16日	7月31日	8月18日	±0日	2日早い
水俣	8月2日	8月19日	8月2日	8月19日	±0日	±0日

イ 発生調査は、果実（100果）を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を超えた場合は防除を行う。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎ナシ

1) ハダニ類

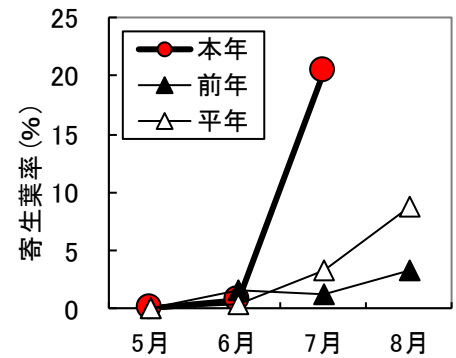
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、一部のほ場で多発し、寄生葉率20.3%（平年3.3%）と平年比多の発生であった（+）

(3) 対策

ア 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率が20%以上、1葉当たり1～2頭に達したら防除を行う。



ハダニ類寄生葉率の推移

2) ナシヒメシンクイ

(1) 発生量：やや多

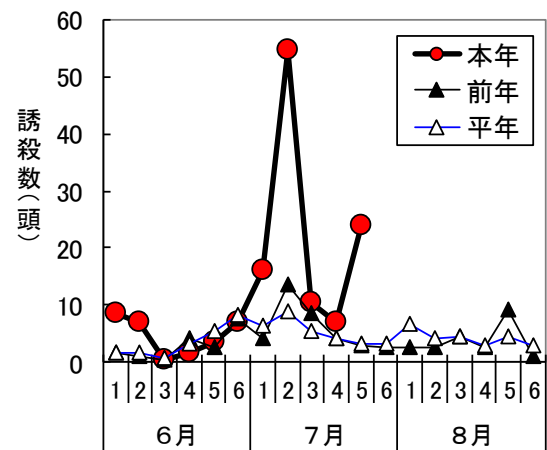
(2) 根拠

ア 宇城市のフェロモントラップ調査では、7月上旬以降に誘殺数が増加し、平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 果実の成熟に伴い侵入量が急速に増加し、収穫直前の果実を激しく加害するため、定期的に園を見回り、成虫の発生盛期～10日後頃を中心に薬剤防除を行う。

イ 性フェロモン剤（交信攪乱剤）は、成虫発生初期から設置するが、フェロモンは空気より重く、傾斜地では下に流れるため、ほ場の上部では設置本数を多くする。なお、モモノゴマダラノメイガには効果がないので、注意する。



ナシヒメシンクイ誘殺数の推移
(宇城市・桜・フェロモン)



◎果樹全般

1) カメムシ類

(1) 発生量：少

(2) 根拠

ア 7月第1～5半旬までの予察灯及びフェロモントラップによるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数は、合志市及び宇城市、天草市で平年比少の発生であった（－）。

イ 7月下旬のヒノキ球果に寄生していた成幼虫数は2.8頭／5枝（平年5.1頭／5枝）と平年比やや少であった（－）。

ウ ヒノキ球果の1果当たりの口針鞘数が25本に達する時期が、新世代成虫がヒノキ球果から離脱し、樹園地へ飛来する時期の目安となる。

7月下旬の口針鞘数は、県内6地点の平均が2.1本／果（平年4.7本／果）と平年比やや少であり、球果からの離脱時期が早いところでも8月下旬頃からはなると予測されることから、8月の新成虫飛来は少ないと思われる（－）。

表 ヒノキ球果からの離脱日の予測

調査地点	離脱予測日
熊本市(河内)	9月11日
宇城市(松橋)	9月12日
宇城市(三角)	8月22日
合志市(栄)	9月12日
天草(上島)	9月1日
天草(下島)	9月12日

福岡県が開発した予測式を使用し、7月下旬に算出した。

表 7月第1～5半旬の予察灯・フェロモントラップによるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数（頭）

地点名	種類	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ		
		本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
合志市	予察灯	4*	71*	－	0*	38*	－
	フェロモン	4	466	1%	0	2	0%
宇城市	予察灯	27	1,832	1%	9	875	1%
	フェロモン	15	7,829	0%	0	19	0%
天草市	予察灯	40	9,599	0%	24	970	2%
	フェロモン	7	3,721	0%	0	53	0%

*合志市予察灯は故障のため7月第3半旬までの誘殺数

(3) 対策

ア 果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。

イ カメムシ類の予察灯及びフェロモントラップの誘殺数、ヒノキ球果口針鞘数のデータを病害虫防除所のホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）に掲載しているので、防除要否や適期防除の参考にする。

ウ ピレスロイド系殺虫剤（IRACコード3A）は、天敵等への影響が大きく、ハダニ類の発生を助長するので、最小限の使用にとどめる。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎夏秋トマト

1) 灰色かび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発病株は確認されず（茎葉平年3.7%、果実平年0.0%）、平年比やや少の発生であった（一）。

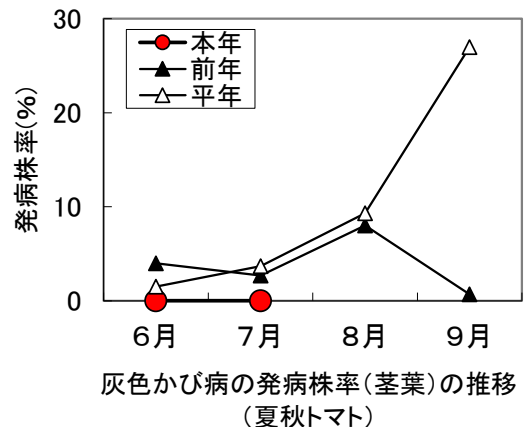
(3) 対策

ア 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

イ 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

ウ 9月の秋雨の時期に発生が多くなる傾向にあるため、発生が見られたほ場では8月の防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) 葉かび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発病株は確認されず（平年7.4%）、平年比やや少の発生であった（一）。

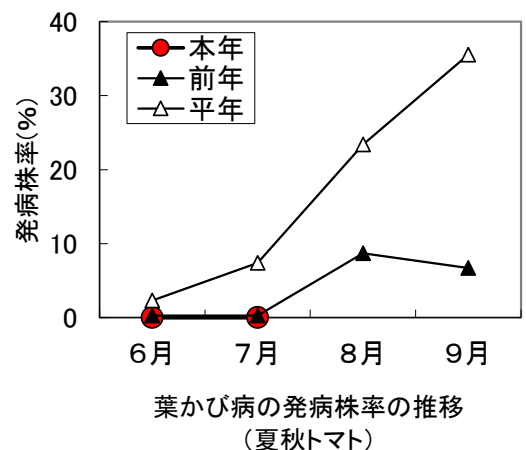
(3) 対策

ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 被害葉や老化葉は早めに除去する。



3) すすかび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発病株は確認されず（平年4.7%）、平年比やや少の発生であった（一）。

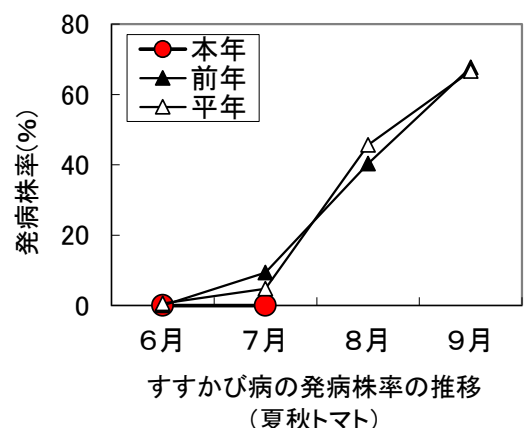
(3) 対策

ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 被害葉や老化葉は早めに除去する。



4) うどんこ病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発病株率2.3%（平年9.9%）と平年比やや少の発生であった（－）。

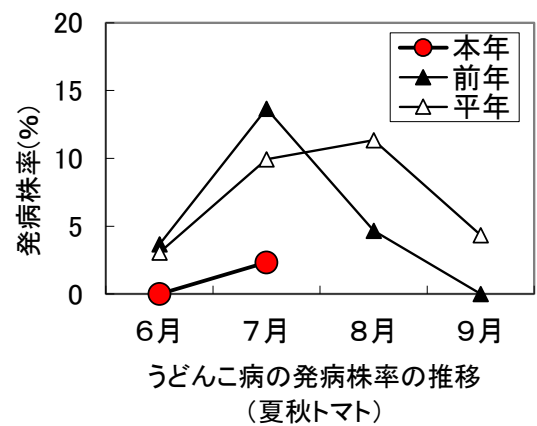
(3) 対策

ア 乾燥条件でもよく発生するので、ハウス内をあまり乾燥させないように管理する。

イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 多発すると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎イチゴ育苗ほ

1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、発病株率0.7%（平年0.0%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

(3) 対策

ア 親株床、育苗床はビニルで雨よけをする（3防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

イ 頭上かん水を避け、株元に手かん水する。

ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

エ 発病株は早期には場外に持ち出し、ビニル袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後及び摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。

2) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、寄生葉率9.0%（平年26.9%）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

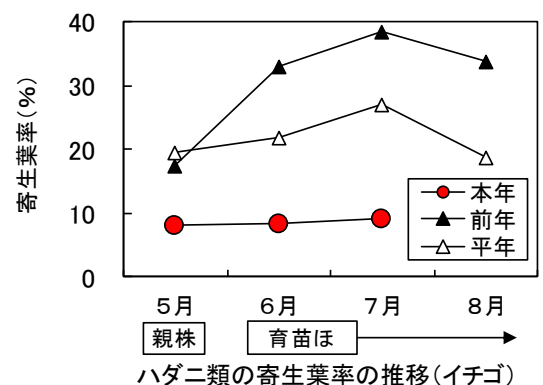
ア 本ほに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する（3防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

イ 寄生葉を早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期から防除を徹底する。

エ 葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏にも十分かかるように散布する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、育苗から本ほでの栽培期間を通した防除計画を立て、育苗期は気門封鎖剤を主体とした防除を行う。



3) アブラムシ類

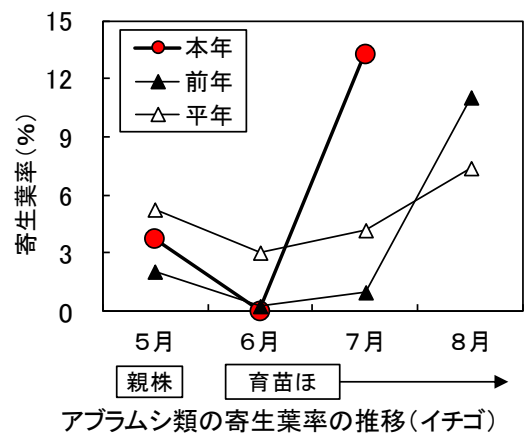
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 7月の巡回調査では、一部は場で多発し、寄生葉率13.3%（平年4.2%）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策

- ア 本虫の寄生した株をハウス内に持ち込まない。
- イ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。
- ウ ワタアブラムシについては薬剤感受性の低下した個体群も見られるので、薬剤防除にあたっては、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋果菜類（高冷地）

1) コナジラミ類

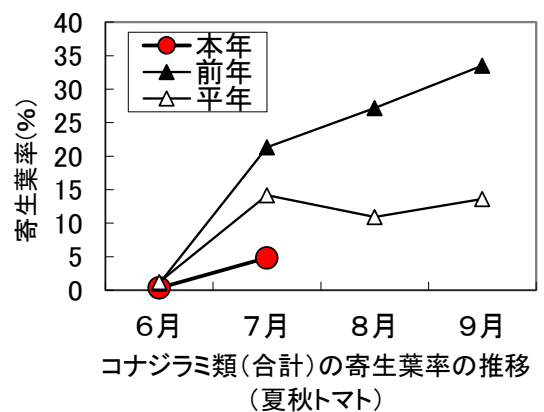
(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 7月の夏秋トマトの巡回調査では、寄生葉率4.8%（平年14.2%）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策

- ア 幼虫や成虫などの発育ステージによって有効薬剤が異なる。複数の発育ステージの個体が混在すると防除が困難となるので、初期防除を徹底する
- イ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。
- ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。
- エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋果菜類（平坦地）

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 防除員報告では、夏秋キュウリで平年比やや多～並、夏秋ナスで平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

- ア 密度が高くなると各発育ステージが混在し防除が困難となるため、低密度での防除を徹底する。
- イ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。
- ウ 密度が高くなると防除が困難となるため、黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。
- エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 防除員報告では、夏秋ナス、夏秋キュウリで平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努める。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類の黄化えそ病の病原ウイルスを、ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類およびトマトでは本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病対策「入れない」対策を徹底しましょう**」を参照）。

ウ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎野菜類全般

1) オオタバコガ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 各地のフェロモントラップによる、6月第5半旬～7月第4半旬の誘殺数（8月発生の前世代成虫）は、平年比やや多であった（+）。

表 各地域のオオタバコガの誘殺状況（6月第5半旬～7月第4半旬）

市町村名（地域名）	本年（頭）	平年（頭）	平年比（%）
合志市（栄）	173.5	112.4	154.4
八代市（鏡）	11.1	13.7	81.0
阿蘇市（一の宮）	23.0	15.0	153.3
山都町（鶴ヶ田）	18.9	11.5	164.3

(3) 対策

ア 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

イ 1卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難である。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで加害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。

ウ 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3 防除のポイント等

斑点米カメムシ類の発生に注意しましょう

今年度は斑点米カメムシ類の発生が多い傾向にあります。発生が見られるほ場では、以下の対策を行いましょう。

- (1) 畦畔雑草は出穂の10～20日前までに除草する。ただし、カメムシが水田に侵入するのを防ぐため、出穂後は除草を行わない。
- (2) 防除適期は、穂揃い期とその7～10日後（乳熟期）である。2回の防除後に生存虫や新たな侵入が認められる場合は、穂揃い期の14～20日後（糊熟期）に追加防除を行う。地域で一斉防除を行うと効果が高い。
- (3) 斑点米カメムシ類の種類によって薬剤の効果が異なる。発生している種類を調べて、効果の高い薬剤を選定する。ピレスロイド系（IRACコード：3A）はミナミアオカメムシに対して効果が劣る。またネオニコチノイド系（IRACコード：4A）はクモヘリカメムシに対して効果が劣る。
- (4) 薬剤の使用にあたっては、使用回数、濃度、使用量、使用時期を遵守するとともに、周辺作物や有用昆虫・魚介類等の環境に影響がないよう農薬飛散（ドリフト）防止に努める。付近にミツバチの巣箱が設置してあるほ場では、事前にその管理者に連絡するなど、農薬による危害防止に努める。

紋枯病の発生に注意しましょう

紋枯病は高温、多湿の気象条件及び多肥、密植で発病が多くなります。福岡管区气象台が7月24日に発表した向こう1ヶ月の予報では、降水量は平年並ですが、気温は高くなる予想です。普通期水稻では、最高分げつ期頃から発生し始め、穂ばらみ期以降に上位葉鞘に病斑が進展します。特に、出穂期以降に高温が続くと進展するため、注意が必要です。

紋枯病の発生が多い、または紋枯病に登録のない箱施用剤を使用しているほ場では、以下の対策を行いましょう。

- (1) 普通期水稻では、穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤散布を行い、その後の進展状況に応じて2回目の散布を行う。
- (2) 防除の目安となる要防除水準は、穂ばらみ期の発病株率が20%である。
- (3) 茎葉散布は穂ばらみ期から出穂期にかけて、粒剤施用は出穂20日前頃に行う。



台風接近時の虫媒伝染性ウイルス病まん延防止対策について

近年、トマトやウリ科野菜における抑制栽培及び促成栽培での虫媒伝染性ウイルス病の多発要因の一つとして、育苗期や定植初期の台風接近に伴って、ビニル被覆を除去したり、定植前の苗を移動させた際に、保毒虫が侵入し、生育初期に感染してしまうことが考えられる。

これからの時期は、トマトやウリ科野菜で抑制栽培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなり、台風シーズンも本格化するため、台風接近時には以下の対策を行い、生育初期のウイルス感染を防止しましょう。

1 事前対策

- (1) 被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無いか点検し、必要に応じて補修する。
- (2) ハウス内の感染株は伝染源となるので、抜き取り適正に処理するか茎を切断する等して枯らしておく。
- (3) 台風の進路等によっては、ビニルを除去する可能性があるのでコナジラミ類・アザミウマ類の飛散予防策として、防除を徹底し生息密度を下げる。
- (4) 台風の被害が大きいことが予想される場合、鉢上げ前の播種箱やセルトレイの苗は納屋等に移動する。
- (5) 育苗ハウスから苗を運ぶ際には、移動中にコナジラミ類・アザミウマ類が寄生しないよう、運搬車等の荷台を防虫ネットやほろ等で覆う。

2 事後対策

- (1) ビニル・防虫ネットを除去した場合、早急に再度展張する。
- (2) 移動しておいた苗は育苗ハウス内に運び込む。
- (3) 寒冷紗等の被覆を行った苗は、早急に被覆を除去する。
- (4) 上記の作業が終了したら、薬剤散布を実施し、コナジラミ類・アザミウマ類の防除を行う。



野菜のウイルス病対策「入れない」対策を徹底しましょう

本県では「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「スイカ退緑えそ病」、「トマト黄化えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらのウイルス病対策は、ウイルス感染植物を除去することと保毒虫を防除することが基本となります。しかし、薬剤処理による媒介微小害虫の防除だけではウイルス病を完全に抑えることは困難であるため、耕種的防除や物理的防除を組み合わせた総合的な防除対策を講じる必要があります。

特に、これからの時期はトマトやウリ科野菜で抑制裁培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなり、施設内への飛び込みが更に多くなるため、育苗期や定植直後にウイルスに感染するリスクが高まる時期となります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。そこで、野外から微小害虫を施設内に入れないようにしましょう。感染が早いほど経済的被害が大きくなるため、特に育苗期の対策はしっかり行いましょう。

1 育苗期

- (1) 育苗ハウスは、本ぽと別に設け、ハウスの開口部(サイド、換気部など)には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆する。
- (2) 雑草および野良生えは微小害虫のすみかとなるため、育苗開始10日前までにハウス内・周囲から除去する。
- (3) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- (4) 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (5) 定植2～3日前に、育苗期後半に登録のある薬剤を処理する。

2 本ぽ定植以降

- (1) サイド開口部は目合い0.4mm(アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下)防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。
- (2) ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。
- (3) 育苗ハウスから本ぽへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。
- (4) 育苗期後半に薬剤処理ができていない場合には、定植時に登録のある薬剤を必ず処理する。



イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう

1 ハダニ類

本ほに持ち込まないよう、育苗期の防除を徹底しましょう。

＜防除対策＞

- (1) 育苗ほ周辺およびほ場内の雑草は定期的に除草する。
- (2) 下葉の裏に多く寄生しているので、老化葉は積極的に除去する。
- (3) 除去した下葉は、ほ場外に持ち出し、速やかに処分する。
- (4) 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分に確保し、丁寧に散布する。
- (5) 育苗ほでの発生が認められた場合は、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。ただし、気門封鎖剤は、直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、残効も短いので、5～7日の間隔で複数回散布する。
- (6) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- (7) 天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を使用する場合、育苗期の段階で用いる農薬においても、天敵への影響が残る期間を考慮して選ぶ。

2 炭疽病

保菌株からのまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

＜防除対策＞

- (1) 苗床は必ず雨よけを行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- (2) 育苗ほは、冠水しないように排水対策を講じる。
- (3) 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。
- (4) 定期的に予防防除を行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- (5) 発病株は速やかにほ場外に持ち出し、ビニル袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

3 うどんこ病

この時期の発生は気温が高く病徴が見えにくくなります。本ほ定植後の発生を抑制するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

＜防除対策＞

- (1) 発病葉および不要な下葉は早めに取り除き処分する。
- (2) 早期発見のため、発生しやすい葉裏まで丁寧に観察する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- (4) 定期的に薬剤防除を行い、葉裏に十分かかるように散布して新葉への感染を防ぐ。



Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項等
		平年比	
普通期水稻	ツマグロ ヨコバイ	並	巡回調査では、平年並（±）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる調査では、6月第6半旬～7月第5半旬の誘殺数は平年並（±）。
	ヒメトビ ウンカ	並	巡回調査では、平年並（±）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる調査では、6月第6半旬～7月第5半旬の誘殺数は平年比やや多（+）。
	セジロウン カ	やや少	巡回調査では、平年並（±）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる調査では、6月第6半旬～7月第5半旬の誘殺数は平年比少（-）。
夏秋ナス （平坦地）	灰色かび病	並	防除員報告では、平年並（±）。 発生が見られたほ場では8月の防除を徹底する。
	すすかび病	並	防除員報告では、平年並（±）。 葉裏にも十分かかるように薬剤散布を行う。
イチゴ育苗 ほ	うどんこ病	並	巡回調査では、平年並（±）。 防除員報告では、平年並（±）。 初期発生を認めたら直ちに薬剤散布を行う。
夏秋 キュウリ （高冷地）	べと病	並	防除員報告では、平年並（±）。 適正な肥培管理を行う。
	うどんこ病	並	防除員報告では、平年並（±）。 発生を認めたら、直ちに薬剤散布を行う。
夏秋 キャベツ	黒腐病	並	防除員報告では、平年比やや多～並（±）。 発生後の防除は困難なため、激しい風雨が予想される場合には事前に薬剤散布を行う。
野菜類全般	ハスモンヨ トウ	並	フェロモントラップの6月第5半旬～7月第4半旬の誘殺数は、八代市で平年並、合志市、阿蘇市で平年比やや少、山都町で平年比少（-）。防除員報告は、夏秋トマト、イチゴ、夏秋ナス、キク、サトイモで平年並、アスパラガスで平年並～やや少（±）。 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では防虫ネットで侵入を防ぐ。
【野菜病害虫の共通対策事項】 ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める（病害）。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。			



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL : 096-248-6490) にお問い合せ下さい。

※なお、本文はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。

